

# 自己学習力を育むカリキュラム開発研究2（中学校）

－自己評価力を育む授業設計の工夫－

川原田 康 文<sup>1</sup>

本研究では、中学校における自己学習力の育成を「自己評価力」の視点から考察する。自我の発達する中学生期においては、学習と自我形成は密接な関係にある。自らの学習を客観的に判断し、自己評価する能力は、主体的な学習を行う上で重要な要素である。ここでは生徒一人ひとりの主体的な学習活動の促進を図るための方策を考察した。

## はじめに

現代の子どもたちの学習状況には、とても厳しいものがある。様々な調査から学力低下、学習時間の減少、目標意識の低下など、学習からの逃避といえる状況が見られる。変化の著しい時代に生きる子ども達が、生涯にわたって自ら学び続ける学習活動の基盤や姿勢を身に付けることが学校教育の課題となっている。

このような状況を踏まえ、中学生に対して特に身につけさせなければいけない力とは何かを探り、生徒の自己学習力の育成に向けて、教科指導における効果的な学習指導法を研究するとともに、中学生期で特に重視する点と、柔軟で創造的なカリキュラムの作成に向け、生徒一人ひとりの主体的な学習活動の促進を図るための方策について考察した。

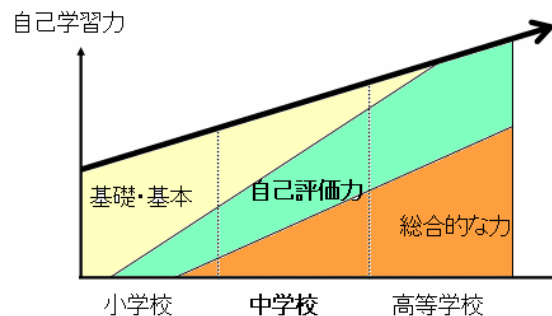
## 研究の内容

### 1 自己学習力と問題解決学習

自己学習力とは、まさに自ら進んで学習に取り組もうとする力そのものである。学習に取り組む態度が能動的であり、将来にわたって自ら学び続けていくことができる力を育むことが重要である。そこで、児童・生徒の発達段階における自己学習力を考えたとき、小学校では学ぶ力の基礎づくり、中学校では自分の能力を理解する力（自己評価力）の育成、そして高等学校では小・中学校で培った力を総合的に高めることで、生涯学び続け自己を高めていこうとする力を養うことができると思う。

児童・生徒の成長と自己学習力の育成を第1図のように考えた。これらの3つの力を育てるためには、問題解決的な学習が有効であると思う。最近の研究において、メタ認知、自己制御学習、自己モニタ力などの認知心理学の考え方が問題解決的な学習に取り入れられてきている。

生徒が自ら学習に取り組むようになるには、今、自分の学習に何が足りなくて、何を伸ばしていけばよい



第1図 児童・生徒の成長と自己学習力の構成

のか、次の学習へのステップをどう踏めばよいのか、そのようなことを自ら判断・評価できるようにしなければならない。

自我が発達する中学生期においては、問題解決的な学習を取り入れ、自ら目標を設定して学習し、その学習の過程で、自分の力を評価する学習を繰り返すことを通して、自己評価力を育成することが重要であると考えた。

### 2 自己評価力の育成に向けて

平成12年12月の教育課程審議会は「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）」において、児童・生徒にとって評価は、自らの学習状況に気づき、自分を見つめ直すきっかけとなり、その後の学習や発達を促すという意義があるとし、「評価のあり方について教育活動の特質や評価の目的等に応じ、評価の方法、場面、時期などを工夫し、児童生徒の成長の状況を総合的に評価することが重要である」と述べている。特に「自己評価については、自ら学ぶ意欲などを見るうえで有効であるばかりでなく、児童生徒が自分自身を評価する力や他人からの評価を受け止める力を身につけ、自己の能力や適性などを自分で確認し、将来を探究できるようにするためにも大切である」と述べている。

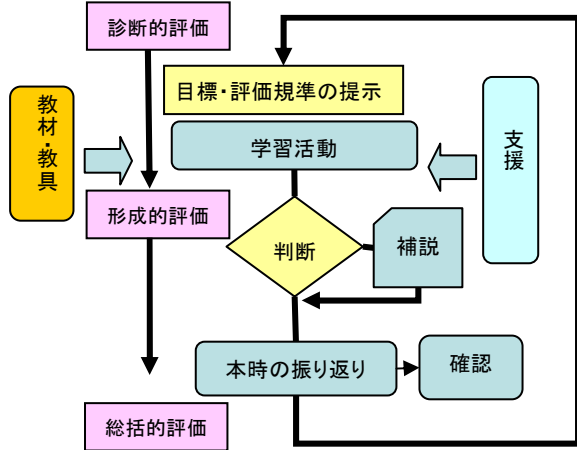
問題解決的な学習では、目標を設定し学習している過程で、自己を見つめ自己評価をして、それが次の学習に向けての力となる。この自己評価は、「学習の内容がわかった、理解できた」という喜びの実感、「こ

1 人材育成課 研修指導主事

の内容がわからない」という確認と認識、「次の時間はこうしたい」という意欲などを育み、それが次への学習へと発展させていく力となる。また、生徒の自己評価を教師が把握することは、教師にとっても指導の改善へとつながると考える。

### 3 指導の流れと自己評価力の関係

学習を進めるにあたり、指導の流れと自己評価の流れは次のようになる。

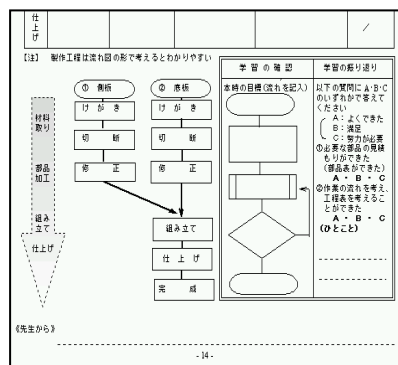


第2図 指導の流れと自己評価の流れ

学習活動の中で生徒が行う自己評価には、教師が行う評価と同様に、単元の導入時に自ら行う診断的評価、学習途中に行う形成的評価、単元末に行う総括的評価が必要である。診断的評価では、既習の知識・理解や技能等の定着について自ら確かめるためにレディネス・テスト及びチェックを行う。形成的評価は、目標に対する達成状況などを把握し、学習の修正や資料として活用する。単元末に行う総括的評価は、単元目標の実現状況や成長の状況を捉える。これらを学習の流れに沿って行い、教師の評価と関連させ適切なアドバイスを行い、生徒の自己評価力を向上させていきたい。このような指導を積み重ねることで、生徒自身が現在の力を適切に把握し、問題解決能力を向上させていくことができるようにする必要があると考える。

### 4 自己評価力の育成の実践例

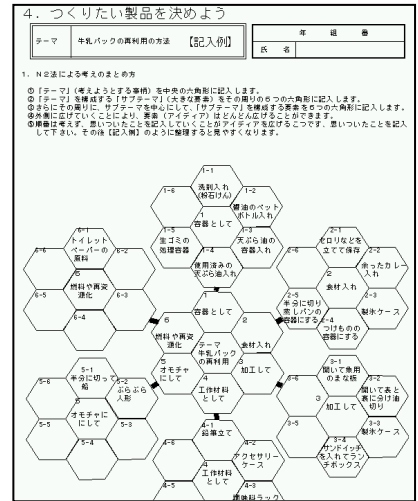
自己評価力を育成する例として、よく使われているのが自己評価票である。授業時に、学習プリントや自己評価票、生徒が記入するノートなど様々な教材がある。そこで第3図



第3図 学習プリントの例

のように学習プリントと自己評価票を組み合わせることで、学習終了後にもそのとき自分がどのようなことを思ったか、学習の内容はどのようなものだったかなどをポートフォリオ的にまとめ、評価することができる。今回例として挙げた学習プリントの自己評価には、フローチャートを取り入れた。フローチャートは学習の流れを確認する上で、わかりやすいと考える。

また第4図に示すN2法を使った学習プリントでは、診断的評価、総括的評価を同じ項目で見ることができる。N2法では記入した生徒がその場で発想や知識の広がりを見ることができ、自己評価を行うことができると考える。



第4図 N2法を使った学習プリントの例

### おわりに

これまで、中学校における自己学習力について検討してきた。様々な事例などから、自我の発達する中学生期における効果的な指導としては、学習の目標を明確化すること、生徒の自己評価力を育成する教師の適切な指導が必要であること、ワークシートの活用が有効であること、扱う教材も影響が大きいことがわかった。来年度、これらのことを踏まえ教科特性を考慮して、調査研究協力員とともに確かな学力を育むカリキュラムの開発を行っていきたい。

### 参考文献

加藤明 2003 『評価規準づくりの基礎・基本 学力と生長を保障する教育方法』 明治図書  
 無藤 隆 2004 「学校教育で身に付ける学力」(指導と評価 2004年10月号) pp. 17-20  
 辰野千壽 2005 「セルフコントロールとは」(指導と評価 2005年2月号) pp. 4-7  
 神奈川県立総合教育センター平成15年度長期研修員研究報告第2集  
 文部科学省ホームページ 学力向上フロンティアスクール中間報告 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/14/05/020507a.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/14/05/020507a.htm) (2005年2月)